

論文の内容の要旨

論文題目 境界の作家ダニロ・キシユ
—「ユーゴスラヴィア」から「中央ヨーロッパ」へ—
氏名 奥 彩子

本論文は、ユーゴスラヴィアの作家ダニロ・キシユ Danilo Kiš の作品世界の全体像を示すことを目的としている。

キシユは、1935年にユーゴスラヴィアのハンガリーとの国境の町スポティツァで、ハンガリー系ユダヤ人の父とモンテネグロ人の母のあいだに生まれた。ユダヤ人に対する迫害が荒れ狂い、自らも死の危険におびえながら過ごした子供時代と、父親の喪失（キシユの父とその親戚の多くはアウシュヴィッツで消息を絶った）は、キシユの心に、深い傷を与える。この傷は、フロイトの「不気味なもの」という論文に見られる考え方を取り入れて、キシユ自身によって「不安を生み出す差異」と名づけられ、創作の源泉となった。さらに、ハンガリーとユーゴスラヴィア、ハンガリー系ユダヤ人とモンテネグロ人、セルビア正教とカトリックとユダヤ教といった、地理と民族にはじまり、言語、宗教、文化にわたる「境界」に生をうけたという意識によって鋭く磨かれた、差異についての感覚は、キシユを自己のアイデンティティの追求に駆り立てた。こうして、キシユは創作活動を通じて、境界性をつきつめることで普遍的なものを獲得しようと試みる。自己のアイデンティティの「境界」に立つということは、そこに、深い亀裂が網目のように走っていることを意味する。キシユは苦痛を受け入れるように、亀裂を受け入れようとした。まず、受け入れて、それから、一つずつ、検証し、確認していく。このように進行する事態こそ、キシユの創造の歩みに他ならない。

キシユは小説というジャンルを自ら選択して、初期の小説『屋根裏部屋』、『詩篇四四』（1962年に合冊の形で出版）から、自伝的三部作と呼ばれる中期の小説群『庭、灰』（1965）、『若き日の哀しみ』（1969）、『砂時計』（1972）、そして、後期の短篇小説集、『ボリス・ダ

『ヴォドヴィチの墓』(1976)と『死者の百科事典』(1983)まで、一つずつ作品を作り上げていくが、そのたゆみない作業は、差異をその度ごとに追求し、明るみに出していくプロセスであると同時に、自己のアイデンティティを検証し、確認するプロセスでもあった。さらに、この実践は、文学においてだけでなく、キシユの生涯においても、なされた。1979年、キシユはパリへの「ジョイス的亡命」を選びとり、以来、死去までの10年間を異郷で暮らしたのである。

そこで、本論文は、序論で、「ユーゴスラヴィア文学」の歴史とキシユの伝記的事実を記述し、キシユの文学の根源的な課題である「不安を生み出す差異」について考える。その後、普遍的なものを志向するキシユの境界性が、どのような作品を生み出しているかを見るために、六つの章をもうけて、キシユの小説作品すべてを、年代を追って、順次、読み解いていく。そして、キシユが後年主張した「中央ヨーロッパの作家」という自己認識の特性について考察し、「ユーゴスラヴィア」に加えて、「中央ヨーロッパ」という観念が、キシユにとってどのような意味をもっていたのかを明らかにしていく。

以下、各章を概観すれば、第一章、「詩と小説のはざま」は『屋根裏部屋』を扱う。この小説には、諷刺詩という副題がつけられており、キシユの創作活動の原点であった「詩」への志向が「小説」の形式で実現された作品である。詩と小説という二つの方向性が、若きボヘミアンの空想小説とも言えるテキストのなかで、どのように融合しているかについて、主要な素材を具体的に検討する。この融合は、「諷刺詩」という副題、登場人物の名づけ、作中詩、その他にもよく表れているが、しかし、後年のキシユの言葉で言えば、「なりそこないの詩人」という自己の検証と確認はすでに終わっていると見なければならない。作中で、小説の技法がさまざまに試されているのも、抒情から叙事へという作者の内的な視点の転換に応じたものである。

第二章、「ユダヤという主題」では『詩篇四四』に着目する。これは、アウシュヴィッツの強制収容所を舞台とする小説であり、キシユが自己の創作のなかで、ただ一つ、再版と翻訳を認めていない作品である。研究対象となることもきわめて少ない。キシユは、なぜ、この小説が注目されることを避けたのか。ユダヤ人という自己意識のアンビヴァレントなあり方を「不安を生み出す差異」との関連で検討し、また、正教、ユダヤ教、カトリックという三つの宗教の境界に生を受けたキシユが、神と宗教についての考え方を、どのように表現しているかを分析する。この作品以後、キシユは「ユダヤ性」を直接の主題にして創作をすることに非常に慎重になる。それは、一つには、「ユダヤ作家」というレッテルを貼られる危険に気づいたからである。しかし、その危険が、かえって、「不安を生み出す差異」の源泉としての「ユダヤ性」を深く追求する意志をキシユに固めさせたのではないだろうか。

第三章、「世界の書物」では、キシユの自伝的三部作(『庭、灰』、『若き日の哀しみ』、『砂時計』)を取り上げる。まず、自伝的三部作を、「文学をめぐる教養小説」という視点から読み解き、『砂時計』の重要性を確認する。『砂時計』は、失われた一つの世界の完全な再構築を目的として書かれたが、その際、「文学的道具」に選ばれたのは父親の像である。キシユは、「ユダヤ性」に直接関わってくる父を主人公とするにあたって、表現形式にさまざまな工夫をこらして、距離をとっている。すなわち、章を節に分ち、客観的記述に加えて、覚書、対話、そして、実在する手紙というように、記述の方式を次々に変化させ、ま

た、細部の技法としては、異化、断片化、モンタージュ、羅列、ディテールへの固執、パステーション、等々を駆使している。異色の長編小説がこうして織りなされたが、これは世界の隠喩としての書物と言うべき小説であり、一人のユダヤ人をめぐって、かつて存在したが、いまや、歴史の闇のなかに失われた世界の再創造を成し遂げたものである。ここでは、主人公が死後に遺した「覚書」の言葉は、人間であることの深奥から発する、普遍的なものの光を帯びるに至っている。

第四章、「1970年代の文学論争」は、『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』が引き起こした熾烈な論争について、まず、その経緯を詳細に見る。そのうえで、事実を利用し、フィクションを駆使して、キシユが、どのように7篇の短篇小説を作り上げ、また、一つの作品として構成したかを検討する。『屋根裏部屋』の創作のときから、言わば取り憑かれていた「一人称という宿命」から解放され、「三人称」にたどり着いた『砂時計』を経て、この、創作と引用、虚構と事実の間隙を縫う短篇小説群においては、「三人称複数」が志向される。個としての人間に根ざしながらも、個人の桎梏から解放された歴史、それは個の体験を、いかに普遍的なものとして表現するかという課題のもう一つの達成である。

第五章、「語り手としての女たち」は、『死者の百科事典』のなかから、女性を語り手とする2つの短篇、表題作の「死者の百科事典」と「赤いレーニン切手」を扱う。「愛と死」を中心的な主題とする、この作品で、キシユは、『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』では排除するほかはなかった抒情を、女の語りという工夫を導入することによって、復権させている。女の語りは、時には感傷を響かせながら、感情も豊かに、男の人生を歌い上げていく。そして、そこに、作者である男の声が、さらに、加わる。幾重にも重なり合う声から生まれるハーモニー、これこそ、キシユが作家として長年の課題としてきた「知的な抒情」である。

第六章、「故国のない男」は、『死者の百科事典』に収録する意図で創作されたが、ついに未完成に終わった短篇「アパトリッド」を、まず、取り上げる。この作品は、キシユにとっての「中央ヨーロッパ」が単なる地理的概念から、文化的統一体という新しい観念へと移行していく、その過渡期のあり方を、エデン・フォン・ホルヴァートという典型的な「中央ヨーロッパ人」の劇作家の運命を描き出すという形で具体的に示している。そして、この「中央ヨーロッパ人の運命」こそ、キシユが身をもって生きることになる運命であった。そして、次に、キシユが「中央ヨーロッパ」という観念をどう受け止めてきたか、その変遷を明らかにし、1986年のエッセイ「中央ヨーロッパ変奏曲」を主な素材として、「境界」の作家、キシユにとっての「中央ヨーロッパ」の最終的な意味を検討する。

最後に、結論、「境界の作家ダニロ・キシユ」は、「境界の作家」としてのキシユのあり方を、すべての作品の読解の結果を通して、まとめる。キシユが自己のアイデンティティの追求のはてに、普遍的なものが存在する場として見出したのは、「中央ヨーロッパ」である。「精神的な意味で、僕は、ユーゴスラヴィアから中央ヨーロッパへと転じた」と、1989年に、キシユは語っている。それは、ユーゴスラヴィアが解体に向けて加速度を増していくなかでの、苦渋の発言であった。「精神的な意味で」とは、作家としてのアイデンティティに関わって、ということである。「境界」という位置に立ちつつ、自己のアイデンティティをどこまでも追求してやまない、一つの意志、それは、キシユが「境界の作家」であることの証であった。